



歳時記のある暮らし

二〇二一年《十一月》

「落ち葉焚きが懐かしい向寒のころとなりました。」

皆様、おすこやかに過ごしてでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき、誠にありがとうございます。

十一月は霜月とも呼ばれ霜が降り始めるころで、小春日和が嬉しいものです。

山茶花を雀のこぼす日和哉

正岡子規

木枯らしが吹き始めるころ、ふんわりと白い花をつける山茶花(さざんか)は寂しい冬枯れの庭先を明るく照らします。山茶花はツバキ科ですが、椿のように花ごとほとりと落ちず、花びらが一枚ずつハラハラと舞い散ります。この句では、雀が起すわすかな揺れにも散ってしまう山茶花の花の特徴が描かれています。

この時期は、酉の市(とりいち)亥の子(いのちの子)の祝、二十三日の新嘗祭(にいなめさい)などがあります。十五日は七五三。子供の成長を祝い長寿と幸福を祈願します。七五三が始まったとされる平安時代は医療が今ほど発達しておらず、抵抗力の少ない子供が大きく成長することは困難でした。「七つまでは神のうち」とされ、幼い子供は神様からの預かりものと考えられていました。こうしたことから旧暦の十一月、満月の十五日に収穫への感謝を兼ねて子供の成長も神様に感謝しました。

十八日はボジョレ・ヌーヴォーの解禁日で、フランスの収穫祭の一つです。ボジョレ地方では、その年に穫れたブドウで造るワインを飲んでブドウの出来ばえを確認します。解禁日は、毎年十一月の第三木曜日午前〇時と定められていて、日本では日付変更線の関係上、本場フランスよりも約八時間早く楽しむことができます。

古寺に灯のともりたる紅葉かな 正岡子規

古寺の灯籠にあまりが灯り紅葉が浮かび上がって、ひととき幻想的で素敵な様子が目に浮かびます。晩秋の山々も美しく、北宋時代の中国の画家、郭熙(かくき)が「秋山明浄にして粧うが如く」と述べたことから、秋の山を「山粧う(やまよそおう)」と

(裏へ続きます)

表現するようになりました。山に宿る草木が化粧をするように色づき、まるで山が生きて
いるかのように思える表現です。

街路樹のプラタナス、カツラ、モミジバフウ、ハナミズキも紅葉が進み晩秋の風情を醸し
出します。日本の紅葉は世界でもカラフルで美しいといわれますが、その理由は日本の落葉
広葉樹の種類が、カナダやヨーロッパなどに比べて多いからだといわれます。約百万年前、
地球が度々氷河におおわれた氷河時代、カナダやヨーロッパでは寒さに弱い落葉広葉樹
は死滅し、寒さや乾燥に強い針葉樹が生きのびました。しかし日本では、列島のまわり
を流れる暖流と適度な雨によって落葉広葉樹が寒さと乾燥から守られ生きのびました。

素朴な琴

八木 重吉

この明るさのなかへ

ひとつの素朴な琴今をおけば

秋の美しさに耐えかねて

琴今はしづかに鳴りいだすだろう

重吉は二十九歳の若さで亡くなりましたが、学校の教師をしながらこのような短い詩
をたくさん残しました。空気が澄みわたる秋の日、降り注ぐ光をうけて赤や橙色、黄金色
に輝く紅葉の美しさに琴が共鳴するという四行の詩は、一度読んだら忘れられないく
らい、見事な錦秋の様子を視覚にも聴覚にも訴えかけてきます。

茶の花や利休が目にはよしの山 山口素堂

茶の花も山茶花と同じツバキ科の花で、白い小花の中に黄色の蕊が束になっている控え
目な花ですが、「わびさび」を好む利休なら、茶の花も吉野の桜のように華麗に見えること
だろうと詠んでいます。「わびさび」の心は、美しさを見た目の華やかさだけでなく、控え
目な姿や朽ちたなかにも見出すという感性です。これからの季節、冬枯れの寂しさを
イメージしがちですが、「わびさび」の心をもって冬の素晴らしさを見つけ、楽しく過ごしましょ
う。急な気温の低下にご体調を崩されませぬよう、ご自愛ください。

比白様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係お手紙担当 久郷直子

